もりのおとぎばなし

珈琲豆

むかし、むかし。
あるところに、【魔王の卵】と称される小さな化物がいました。
立派な角と、鋭い爪。とても強い力を持った小さな化物は、とても寂しがりやで優しい心を持っていました。

あるとき小さな化物は、偉大な魔王様になる為のお勉強の息抜きとして、近くの森へ散歩に行きました。
甘くて美味しい木の実を食べて、大きな木の下でお昼寝。青い鳥の群れが幸せを運びに飛び去っていくのを眺めて、小さな化物はそろそろ帰らなくてはと腰を上げます。
その時でした。小さな化物は、ふと誰かに見られているような気がしたのです。きょろきょろと周囲を見回すと、すぐにその視線の主は見つかりました。茂みの奥に、まん丸の赤い目がちょんちょん、と二つ並んでいたのです。
それは、うさぎでした。白い毛並みを持った、ふわふわとしたうさぎが小さな化物をじいっと見つめていました。うさぎは小さな化物に気付かれたことを感じ取ってか、すぐにかさかさと茂みを掻き分け、何処かへ逃げていってしまいました。
小さな化物は、胸に手を当てて不思議そうに首を傾げます。
「どうしてぼくは、こんなにどきどきしているんだろう？」
どきどき、どきどき、どきどき。小さな化物の胸が高鳴るたび、うさぎの赤い目、白い姿が頭に浮かびました。
そう、この小さな化物は、白いうさぎに一目惚れをしてしまったのです。

次の日、小さな化物はお勉強をそこそこに切り上げて、にんじんを片手に森へと向かいました。
迷わずに足を進めたのは、昨日お昼寝をした森で一番大きな木の根元。昨日と同じようにそこに座って、昨日と同じようにきょろきょろと周りを見回しました。
でも、今日は誰にも見られていないようです。まん丸の赤い目も、何処にも見当たりません。
そこで、小さな化物はその場に、持ってきたにんじんを置きました。鮮やかな橙色の、見るからに美味しそうなにんじんです。
にんじんを木の根元に置いた化物は、がさがさと茂みを掻き分けてその中に隠れます。本当は透明になる魔法が使えるのですが、昨日のうさぎの真似をしてみたかったのです。
「あの子は、きてくれるかなあ」
暫くじっとにんじんを見つめていましたが、一向に白いうさぎは現れません。その内に小さな化物は眠たくなってしまいました。今日はまだお昼寝をしていないのです。小さな化物は、ほんの少しだけ、と茂みの中に丸くなってすやすやと眠ってしまいました。

ぱりぱり、という小さな音がしました。その音で、小さな化物は目を覚ます。慌てて木の根元を見ると、昨日のうさぎがにんじんを齧っては口をもぐもぐと動かしているではありませんか。
その姿を見るやいなや、小さな化物の胸はどきんどきんと音を立てます。茂みから出て、うさぎの前に飛び出して行きたい気持ちになりました。
でも小さな化物は、うさぎがにんじんを食べ終わるまで、隠れたまま、その姿をじいっと見つめているだけでした。今自分が飛び出していったら、きっと吃驚して逃げてしまうと思ったからです。
白いうさぎがにんじんを食べ切ってごちそうさまをするように、こりと頭を下げ、ふんふんとにんじんのあった場所のにおいを嗅いでから何処かへ跳ねて行くと、小さな化物は満足そうに頷いて、家に帰ろうと立ち上がります。
「あんなにおいしそうにたべてくれて、うれしいなあ。またにんじん

を、もってきてあげよう」
その日はるんるんと鼻歌をうたって、家に帰って行きました。

次の日も、また次の日も、小さな化物はうさぎのためににんじんを持っていきました。
でも、やっぱり茂みから姿を現したりはしません。うさぎがもぐもぐと、幸せそうににんじんを食べるのをにこにこ笑って見ているだけでした。

その日も、小さな化物はにんじんを木の根元に置いて茂みに隠れていました。
「今日は、なかなかやってこないなあ。」
お昼寝は済ませてきたので、眠くありません。白い姿が見えはしないかと、じいっと目を凝らして木の根元を見つめていました。あんまり一生懸命見ていたので、くいくいと誰かが後ろから引っ張っているのにも中々気付かないほどでした。
ようやく気付いた小さな化物が振り向くと、其処には白いうさぎがちょこんと座っていました。てっきり木の根元に現れるものだと思っていた小さな化物はびっくりして、びっくりする余りひっくり返ってしまいました。
「まあ、そんなにおどろいてどうしたの」
うさぎは面白そうにくすくすと笑っています。その笑顔がとても可愛らしかったので、小さな化物は途端に恥かしくなって顔が真っ赤になり、ほっぺからしゅうしゅうと音を立てて湯気が昇り始めました。
「だ、だって君がいきなり現れたから」
「あら、わたしはずっとあなたの手を引っ張っていたのに、あなたは全然気付かなかったじゃない。それに、女の子の食事風景を覗き見するなんて、趣味が悪い」
うさぎは、ふんと鼻を鳴らして小さな化物を軽く睨みました。小さな化物は、すっかりしょげてうつむいてしまいます。
「でも、あなたがくれたにんじんは、とってもおいしいにんじんだったから、許してあげるわ。ねえ、わたしとお友達になって！見ているだけじゃなくて、一緒にお話しましょうよ」
とっても素敵で嬉しい提案に、小さな化物は考えるよりも先に頷いていました。そんな小さな化物の様子を見て、うさぎはまたくすくすと笑います。

小さな化物とうさぎは、毎日一緒に遊びました。一緒に甘い木の実を食べて、一緒に木の根元でお昼寝をしました。小さな化物が爪を立てないように気をつけてうさぎの背中を撫でてやると、一瞬ひくりと震えるけれど、すぐに気持ちよさそうに目を細めてくれました。小さな化物は、うさぎと一緒に過ごすほどにうさぎのことが大好きになっていきました。
小さな化物は、うさぎに恋をしていたのです。でも、彼は恋をするのは初めてだったし、恋について勉強したこともなかったので、それが恋だなんて思いもしませんでした。
間もなく、小さな化物とうさぎは一緒に暮らし始めました。恋人としてではなく、大好きな友達として。小さな森の外れに小さなお家を建てて、小さな化物の勉強道具を沢山運び込んで。
森の動物達に訊いて御覧なさい、皆が口をそろえて言います。「あの二匹は、とても仲良く暮らしていました」
でも、いつからかうさぎは寂しそうに、窓の外を見つめるようになったのです。

小さな化物は、最初はうさぎの変化には気付きませんでした。立派な魔王様になる為の勉強を、毎日沢山しなくてはならなかったからです。うさぎは机の端にぶら下がって、小さな化物が勉強して居る様子をじっと眺めていました。
でも、小さな化物がうさぎを撫でてあげたとき、ついに気付いてし

まったのです。あんなにふわふわだった白い毛が、ばさばさに痛んでいるではありませんか。びっくりした小さな化物がうさぎに、どうしたの、だいじょうぶ？と慌てて訊いても、
「なんでもないのよ、きにしないで」
うさぎはそうとしか答えてくれませんでした。
うさぎの変化はそれだけではありません。毎晩毎晩苦しそうにキイキィと鳴いて魘されているのです。小さな化物は遅くまで起きて、うさぎが少しでも楽になるようにとその背を撫でてやりました。でも、寝ぼけているのかうさぎは小さな化物の手にきつく噛み付きます。
「あなたのせいよ、あなたのせい」
赤い目をうつろにして、小さな化物を睨んでそう言うのです。小さな化物は噛まれて血だらけになった手に包帯を巻いて、訳の分からないままに「ごめんね、ごめんね。」と謝りながら、と時には一晩中うさぎの背を撫でてやりました。
噛まれた手はとってもとっても痛かったし、きらきらとしているはずの目がうつろになって睨むのはとっても怖かったけれど、それでも小さな化物はうさぎのことが大好きでした。だから、ずうっと撫でてやりました。
段々と、うさぎは小さな化物に冷たくなっていきます。小さな化物にはそれがどうしてなのか全然分からなくて、とても悲しく思いました。
「きっときっと、ぼくがわるいんでしょう。うっかり君の尻尾を踏んじゃったり、気付かないまま蹴飛ばしてしまったんでしょう。ごめんね、ごめんね」
「あなたはそんなことしていないじゃない。分からないなら、放っておいて。」
小さな化物がぽろぽろと泣きながら謝りますが、うさぎはふんと鼻を鳴らしてそっぽをむくばかり。
うさぎは日に日に痩せていきました。痛んだ毛が沢山抜けるようになりました。どんどん元気がなくなって、小さな化物が話しかけても謝っても、無言で睨むことしかしなくなりました。
小さな化物は、うさぎが少しでも元気を出してくれるようにと美味しい料理を沢山作りました。小さな化物は、料理が得意だったのです。うさぎは小さな化物の作った料理を何にも言わずにもぐもぐと食べました。でも、いつも残さず食べてくれたし、食べている時のうさぎは幸せそうに見えたので、小さな化物は頑張って毎日美味しいものを作りました。
良く晴れた日のこと。小さな化物がうさぎを撫でようと背中に手を置くと、うさぎは小さな化物の手を強く噛んで睨みつけました。
「気安く触らないでよ、わたしはあなたのことなんてきらい。」
うさぎは掠れた声で、そんなことを言うのです。どれだけ冷たくされても嫌いだとは言われたことが無かったので、小さな化物は、とっさに言葉が出なくてぽろぽろと涙を流してしまいました。
「どうして、どうしてそんなことを言うの。ぼくは君のこと、大好きなのに」
「そんなこと、知らないわ。あなたが好きでも、わたしはきらいなの」
小さな化物はわんわんと泣き出しました。
「ぼくはきみに、そんなにひどいことをしてしまったの。ごめんなさい、ごめんなさい。あやまるから、きらいになったりしないで。」
「あなたはひどいことなんてしていないわ。わたしは最初から、あなたのことがきらいだったの。ずっとずっと、好きなふりをしていただけよ。」
「全部全部うそだったの？友達になろうって言ったのも？」
「ほんとうは、あのにんじんだってあなたの料理だって不味くて仕方なかったわ。でも、残したら野菜がかわいそうだから、食べてあげて

たの。」
「君は、本当にぼくのことがきらいなんだね」
「ええ、きらい。だいきらいよ。顔も見たくない、撫でられるなんてぞっとする。」
いつのまにか、小さな化物は泣き止んでいました。不思議そうに、首をかしげます。
「じゃあ、どうして君は、ぼくを嫌いだって言うたびに、泣いているの？」
「泣いてなんかいないわよ！」
小さな化物は、うさぎの目元をそっと拭いました。思ったとおり、ぐしょぐしょに濡れています。
小さな化物は布を持ってきて、優しく涙を拭ってやりました。
「きらいだなんて、うそでしょう。どうしてそんなうそをつくの。」
「うそじゃない、わたしを離したりしたら、わたしはあなたをきらいになるわ。わたしのところに戻ってこなくなったら、わたしはあなたをきらいになるわ。」
「ぼくは君を離したりなんかしないし、いつでも君のところに戻ってくるよ」
「ほんとうに？その言葉がウソだったら、わたしはあなたのことをきらいになるわ。」
「本当だよ。ぼくがそんなうそを、つくもんか」
「それなら、わたしももうそはつかないわ。ねえ、撫でるなら手の甲で背中を撫でてよ。あなたがどれだけ気をつけても、爪で引っかかれて、痛いのよ」
「そんなこと、初めて聴いたよ。どうして言ってくれなかったの」
「だって、あなたがとても気をつけて撫でてくれるものだから、それでも痛いだなんて言いづらくなっちゃったのよ」
小さな化物は、言われたとおり手の甲でうさぎの背を撫でてやりました。うさぎは震えることなく、気持ちよさそうに小さな化物の手に擦り寄りました。
しばらく二匹とも、何にも言いませんでした。小さな化物は黙ってうさぎの背中を撫でていたし、うさぎも黙って撫でられていました。
でも、やがてうさぎが、決心したように口を開きました。
「わたしね、もうすぐしんじゃうのよ」
「もうすぐって、いつぐらい？」
「もうすぐは、もうすぐよ。明日かもしれないし、一時間後かもしれないわ。あなたと会う前から、分かっていたことなの。あなたは楽しそうなひとだったから、さいごの友達になって過ごしたら、笑いながら眠れるかしらって、そう思ったの。」
「ぼくが君の、さいごの友達だったの？」
「そうなの。でもね、わたしはあなたと過ごすようになって、想像したとおりの楽しい毎日なんて送れなかったわ」
「ぼくは、そんなにつまらなかったの？」
「ううん、ちがうわ。想像したよりずっと楽しい毎日を過ごせたの。でも、とても苦しくなったわ。とても幸せだったのに、とても苦しかった。」
「幸せだったのに苦しいだなんて、それはどうして？」
「だって、あなた、わたしのことが大好きじゃない。この世で一番、好きでいてくれるじゃない。だから、わたしがしんじゃったら、あなた、悲しむじゃない。ひとりぼっちで、悲しむじゃない。」
「そりゃあ、悲しいよ。君の言うとおり、ぼくは君が大好きだもの。世界で一番大好きだもの。」
「だから苦しかったのよ。あなたを騙しているみたいでつらかったわ。わたしも、思い出作りのためにできた友達、それだけのはずだったのに大好きになっちゃったの。死ぬのは嫌だなって、思ってしまったの。」
「そんなに好きになってくれたの？ぼくのことを？」
「悲しませたくないから、嫌われようとしてみたの。苦しい時に撫でてもらったのに噛み付いたり、そっぽを向いたりしてみたの。一生

懸命やってみたのに、あなたったら、全然きらいになってくれないんだもの！」
「仕方ないよ、だってぼくは君のことが大好きなんだ。何をされたって嫌いになんかなれる筈がないもの。」
「とんだ頑固者だわ、あなた。おまけに、とっても鈍感よ。」
「ドンカン？ぼくが？どうして？」
きょとんとした小さな化物に、うさぎはくすくすと笑います。小さな化物が可愛いと思った笑い方、そのままで笑います。でも、どこか寂しそう。
「ねえ、あのね。お願いがあるの。さいごの我侭で、さいごのお願い。わたしが眠ってしまうまで、ずうっと傍にいて。わたしが眠ってしまったら、あなたと出会った木の下に、わたしのことを埋めて頂戴。」
寂しそうな理由には気付かないまま、うさぎの我侭に、お願いに、小さな化物は頷きました。
自分の中にあるうさぎへの気持ち、その名前は知らないまま、頷きました。
小さな化物は、うさぎが眠ってしまうまで、それを知らないままでした。

大木になった樹の下に一人、魔王様が佇んでいました。
心優しい魔王様。皆から慕われて、皆の為に一生懸命になれる魔王様。でも、彼は妻を娶ることはありませんでした。きっと、これからも無いのでしょう。彼は自分の気持ちの名前に気付いてしまったのですから。
「君が居なくなってから気付くなんて、全く、僕は本当に鈍感だな。」
此処へ来るたび、苦笑交じりに彼はそう呟いて、其処に眠る小さな生き物にこう囁くのです。
「この世界の誰よりも、僕は君の事を愛しているよ。生涯愛し続けるし、いつでも君の元へ戻ってくるよ。」
愛しいうさぎが眠るその場所を手の甲で優しく撫でで、彼は立ち去りました。

余談ですが、その大木に美味しいにんじんを供えると、白いうさぎの陽炎が現れてくすくすと笑うそうですよ。
魔王様が立ち去った後には必ず、美味しそうなにんじんが供えてあるんですって……

（おしまい）